

1. 小児科医数については、国の働き方改革の影響等も考慮すると、今後、不足・偏在が進むことも考えられる。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・小児科医は不足。
- ・小児科医が不足する要因については、①医療分野が細分化されているため専門医が不足する、②開業医の高齢化が進んでいる(5～10年後どうなるか)、③集約化されていない(ため、当直やオンコール、働き方改革に対応するために必要な人員が揃わない)、といった点が考えられる。

2. 小児科医の不足や、開業医の高齢化、少子化の進展などを踏まえ、今後どのように小児(救急)医療体制を維持していくか考える必要。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・富山医療圏では県立中央病院と富山市民病院に集約(R3.4:済生会富山病院の小児科廃止)。小児救急の集約化も予定(R4.4:2次輪番から富山赤十字病院が外れる)。
- ・2次輪番の維持・確保は切実な課題。人口減少などを見越すと、今後の小児医療は集約化の流れも想定されるが、役割分担は必要。
- ・小児救急の平日日中の需要が低減する中、小児科医が今後増えるとも考えにくい。
- ・急患センターの運営に協力する開業医が高齢化しており、将来の担い手不足が懸念。
- ・#8000などの相談機能の活用・充実を図る必要。

3. 小児の難治性疾患(悪性腫瘍や心疾患等)への対応は、富山大学附属病院が中心となって診療が行われている。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・「小児がん」は富山大学附属病院を中心に診療。
- ・小児の白血病や重症の心不全など、重症の小児患者について、専門の医師が充実しており症例数の多い富山大学附属病院が担っていくことが考えられる。
- ・小児医療は「循環器」「悪性腫瘍」「精神疾患」「救急」「感染症」など分野が広い一方、本県はコンパクトな県であるため、役割分担のうえ病院間で一定程度連携することは可能。
- ・富山大学附属病院では、手術を必要とする心臓疾患・悪性腫瘍・白血病・神経を担当、県立中央病院では、小児救急、小児外科を担当、県リハビリテーション病院・こども支援センターや国立病院機構富山病院では、児童精神科を担当といった役割分担が考えられる。

4. 在宅医療(医療的ケア児)への対応は、開業医が中心となって診療している中、デイ・ケアやレスパイト入院の仕組みに対するニーズもある。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・喫緊の課題として、医療的ケア児をはじめとする在宅の小児への対応が弱い。
- ・呼吸器をつけているなどサポートが必要な小児について、保護者が急病の場合などに、付添いなしで受け入れる施設や、レスパイト的な病床が少ない。
- ・医療的ケア児や、精神疾患を持っている親がギブアップした場合への対応として、一時的にケアするレスパイト病床の整備が急務。

5. こどものこころの問題については、多様化するニーズに対し、県リハビリテーション病院・こども支援センターや国立病院機構富山病院が中心となって担っているが、児童精神科医が不足している。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・県リハでは、本来、各医療圏では対応困難な症例等を中心に対応したいが、現状では軽症も含め相当数に対応。高度専門的な検査に対応したいが人員が不足。
- ・児童相談所との連携を深めるなど、受入れ体制を強化する必要があるが、現状の人員では困難。
- ・トラウマに係る専門的な治療を続ける上で、マンパワーが不足。後進がないことも大きな課題。
- ・県内に児童精神科医がほとんどおらず、こどものこころを診る体制が脆弱(南砺家庭・地域医療センターではR3.6月に児童精神科が開設)
- ・地域の開業医における対応(軽症患者のスクリーニング等)や臨床心理士の活用などにより、広く浅く受け皿を確保することが大事。教育センターや総合教育センターの相談機能を活用してもらいたい。
- ・児童精神科医について、すぐには増やせないが、若手人材を育成する仕組みは必要。大学や医療機関の連携・協力のもと、学生や研修医が児童精神を勉強できるプログラムを(県リハに)用意してはどうか。

6. 周産期医療体制は、県立中央病院・富山大学附属病院・厚生連高岡病院を核として運営されている。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・周産期医療については、(NICUがある)県立中央病院、富山大学附属病院、厚生連高岡病院を中心に、病院間の連携を含め安定的に対応している。
- ・県立中央病院の総合周産期母子医療センターは優れたシステムであり、小児救急にも適切に対応可能。

7. 子ども医療電話相談(#8000)や、市町村・厚生センター(保健所)の健康相談、子育てほっとラインなどにより相談支援が行われている。

<公的病院の専門医等の御意見>

- ・子ども医療電話相談(#8000)などの相談機能の活用・充実を図る必要。
- ・電話相談では正確に子どもの状況が分からないこともある。子どもの様子などが見えると、より適切な対応ができる。